

第百十七話 捕虜虐待、反日プロパガンダには毅然と反論を

(関連：第七十一話「日本国内の捕虜収容所実態等」第二十六話「捕虜に係る虐待事例や認識の差」)

上掲の2話で日本軍の捕虜取り扱い等について述べたが、日本軍が一方向的に虐待を繰り返したかのような誤解を与える恐れもあり、日本軍の捕虜取り扱いの実態についての適当な書籍を探していたところ、気鋭のジャーナリスト丸谷元人氏の「日本軍は本当に「残虐」だったのか」(ハート出版)に出会った。300頁弱の本を1枚に要約するのは至難の業であるが、挑戦してみたい。意のある所を汲んで頂ければ幸甚である。



1 「不屈の男アンブロークン」(2010/11/16刊、4年間ベストセラー)の荒唐無稽さ

本の中で描写される余りにも杜撰且つ不正確な事例(奴隷であり、生きたまま食われた、数千人の捕虜が殴られたり焼かれたり、突き刺され、棍棒による投打で殺され、銃殺され、斬首され、人体実験で殺害され、また人肉食の習慣によってetc)その他にも、漂流中の著者に対する日本海軍の爆撃・銃撃の話、捕虜になってからの話等々常識的にも不可解、但し彼を担当した日本軍看守の蛮行は想像を絶するが、彼個人の行為であり、一事をもって万端を推し量った類である。

2 日本の捕虜収容所の実態等

①捕虜収容所で起きた文明の衝突

殴って体で覚えさせることを伝統として日本軍の取扱に耐えられなかった連合軍捕虜

②日本国内の捕虜収容所における「食事」：厳しい食糧事情の中最大限の配慮

③高い死亡率 国内環送中東の病死や戦没まで含めた数字が独り歩き

④捕虜と日本軍将兵との人間的交流を記した連合軍捕虜の手記、日記多数存在

⑤日本軍管理下における捕虜の状態は、捕虜となった際の兵士たちの健康状態(病気、負傷の有無)や、病院どころかまともな道路インフラさえなかった未開で過酷な戦場における環境、そして個々の捕虜の受けた感想は、「被害者意識」の他にも「人種的優越感の裏返しとしての激しい憎悪」等に影響されていた。その一方で、日本側はあくまでも規則に従って、捕虜の管理を行っており、その規則を盾に殴る蹴るの暴行を働いた人間もいたが、その一方で少なくない人たちが、許される最大限の範囲で捕虜を人道的に扱おうとしていた。(同書 178p)

⑥B C級戦犯に対する裁判では、一方的且つ不公平、不十分とも云うべき審理の結果、実に多くの悲劇が生まれることとなったが、・・・(同書 182p)

3 日本人戦犯に対するすさまじい虐待

『戦犯裁判の実相』(単嶋法務委員会・編 槇書房 昭和27年刊の復刻)には、ゲームのみならず、アジア各地で行われた連合軍の裁判の様子と日本人容疑者に対する凄まじい蛮行の限りが詳細に書かれているが、それらの状況は涙なしには読むことができない。(同書 186p~187p)

4 その他

①連合軍による残虐行為について：語られないか、日本が先にやった、残虐だった日本人は何も言う資格がないといった責任転嫁論、また論理を飛躍させ高邁な次元論に

②片腹痛き、自らの残虐行為に頬被りし、70年間の日本軍の行為を掘り出して被害者面

5 正しき反論を

・都合の良いすり替え論法、自己正当化論、日本軍は残虐とする一方的断罪等には正しき反論

・黙っていると認めたことになる・はっきり主張する一方、自らを知り、相手を知り、常に他者への敬意をもって、日本人らしい立ち居振る舞いをも忘れてはならない。

(第百十七話 了)